

B—41 和服縫製上における物理的・化学的諸問題 裕長着における裾芯についての一考察

大谷女子短大 ○河野美代賀
阿部ふき子
三品 岡良

1. 裕長着縫製上、裾合わせをする際、従来裾に量感をもたすためと裾回し布保護のため、裾芯を入れることが習慣づけられて今日に至っている。然し時代によって出衤の分量には差があり、今日においては僅か0.3cm～0.35cm内外の出衤分量になっているが、各種文献をしらべても殆んど「裾芯を入れる」と記載されており、デパートの既成品オール化織地のものにも同様に扱われているので、この習慣が合理的であるかどうかをしらべるために本実験を試みた。

2. A. 試料. a 表地…本モス他9種。b. 芯地…木綿他5種。B. 実験方法, a 摩耗試験: 学振摩擦堅牢度試験機を使用し、摩擦子: エメリーペーパー No.0番: 回転数30回/分: 押圧荷重: 200gにおいて測定。b 防皺度: 東洋精機KK製JRCクリーズレカバリ剤スターを使用し、5cm×1.5cmの大きさの表地試料をはさんだ状態で二つ折にして500gの荷重を5分かけ除重後5分放置し開角度から求めた。

3. 芯地を入れることによって表地の耐摩耗性は向上する場合が多かった。また防皺度について分散分析の結果、芯地に関して有意、表地に関して高度に有意であることがみとめられた。糊抜木綿、着古したモスを用いた場合、特に良好な結果を得た。